介護体験を聞く会

今回は、異食の危険性のあった方でグループホームにはいって介護職員に見守られて安心な生活をおくっている方の症例検討です。しかし時々廊下をウロウロするなどの徘徊があり、言葉がけが気に入らないときは怒るなど、介護職員にとってはまだまだ教えられ、学ばされることが多い。

ホームページ
http://www.yanagida-kaigo.co.jp/

会報第155号
平成27年1月31日発行
発行所：（有）明寿会
住所：川崎区中島1～13～3
電話044～233～0061
＊定例会は最終土曜日　です。
（今年12月は19日）

第156回介護体験を聞く会

参加者：石田さん、武田さん夫婦、植草さん、藤田さん、柳沢さん（利用者家族）多田さん（川崎中央はりきゅう院）、院長、柳田ケアマネ、太田（DC）、高橋、太田（GH）、小沢、石川、長谷川、飯田、山崎、柏倉、漆原、厚川、古谷

事例検討

Uさん（自宅から遠い施設から、近所のグループホームに入居して半年が経過した70代女性）

生い立ち：昭和19年生まれ、川崎区出身。平成19年頃より、運転していった車を置いて帰ってきたり、高速道路に自転車で走っていてパトカーで保護されたりと、認知症症状が顕著になり始めた。平成24年8月から柳田デイサービス利用開始。平成26年3月に老人保健施設に入所。平成26年6月にグループホーム旭町入居。現在要介護3。

歌が好きで、以前はコンサートにもよく行っていた。

既往歴：卵巣摘出、A型肝炎、ヘルニア手術。アルツハイマー型認知症。

内服薬：七物降下湯（血流を改善し、血圧を下げる効果もある）抑肝散加陳皮半夏（神経の高ぶりをおさえ、心と体の状態をよくする）

＊現在のADL

足腰はしっかりしていて、歩行は自立。食事は毎食全量を自己摂取。排泄も基本的には自立。夜間まれに尿失禁があるのでリハビリパンツを着用。こちらから話しかける言葉は理解されているが、発語はうまくいかないことが多く、相互の意思疎通は難しい。

＊入居から現在までの対応：基本的に明るい性格で、体操も声を出して参加されます。また、歌が好きで音楽をかけると手拍子をしながら楽しそうに歌われます。

正月の恒例行事「初詣」

入居当初はスタッフの言葉がけが適切でない時怒って物を投げることがありましたが、スタッフの対応ができるに伴いそのような場面はなくなっています。人の好き嫌いがはっきりあるようで、嫌いな人には怒ったり嫌な顔を見せることもありますが、他の入居者を心配して「あんた、大丈夫？」「しっかりしなさいよ」などと声を掛けたり、自分のおやつを職員や他の入居者に分けようとしたり、優しい一面もうかがえます。台所に置いてある野菜を生のままかじってみたり、他の入居者へ勧めたりされることがあり、異食の可能性もあるので注意して対応しています。

午前中は比較的落ち着いていらっしゃいますが、午後、特に夕方の時間帯になると何かを探すようにあちこち歩き回られ、他の入居者の居室の扉を開け、時には中に入りタンスを開けたりする行動がありました。食べ物を探している時にはお菓子などを提供していましたが、入所時から体重が5・5kg増加しているため、現在は間食は控えています。

＊参加者の発言

Uさん（検討者の夫）

資料にある行動は、家にいたときからやっていた。夕方から階段を30～40往復していた。私が思うに、空腹で何かを食べたいと思うと、歩き始めていたのではないか。カメラ越しに見ていたら、私がいないときに冷凍のハンバーグをそのまま食べていた。以前いた施設では、他の入居者と一緒に広いスペースを歩き回っていた。今は私や娘達が会いに行っても落ちつい

女性職員も餅つきに挑戦

ており、後をついてくることもなくなった。院長：グループホームの他の入居者との世界を共有して、なじみができてきているようだ。ホーム職員：行動し始めたときに「ダメ」という言葉を使ったりせず、行動を制限しないように努めている。写真に向かって話しかけたり、お話しは好き。歌や踊りが好きで、テレビのCMを楽しそうに見ている。洗濯物たたみやテーブル拭きといった家事作業は得意。

「デイケア・デイサービス家族相談会」

Iさん…グループホームで父がお世話になっています。（GH職員から）水様便がほとんど、ここ数日、自分でご飯を食べようとするほど、元気になってきた。

Tさん…（ホームに入居している母が）左肩の骨折の治りかけの時、リハビリ最終日で具合が悪くなり、誤嚥性肺炎と診断され入院した。嚥下検査をして、経口摂取はやめてくれと言われた。胃瘻になるかもしれないが、引き続きグループホームで生活させていただきたいと思っています。

母はデイに通っていた頃、私の家の隣に住んでいたが、サギまがいのシロアリ駆除業者が入っていたり、自転車を乗り捨てて帰ってきて警察からTELがきたりと心配だった。ちょうどそのときグループホームに空室ができ、入居できて良かった。

見守られて餅つき

胃瘻について

Fさん…叔母が胃瘻になったときに、どのようなものか見たことがある。

「グループホームでの年越し」

あけましておめでとうございます。

デイケアやデイサービスと違いグループホームでは年末年始も皆さんと一緒に過ごします。

12月31日にはデイケア職員が打ってくれた蕎麦を皆さんで食べました。グループホームでは95歳を筆頭に長生きな方が多いですが、これからももっと長生きできるようにと願いを込めて食べました。

紅白歌合戦を見ながら過ごし、除夜の鐘が鳴るころにはもちろん皆さん床に就いていらっしゃいましたが、お正月だからか何だかいつもより静かで厳かな夜だったような感じがしました。年が明け、1月1日の朝食はおせち料理とお雑煮です。お雑煮には年末にデイケア、デイサービス、グループホームの皆さんでついたお餅を入れて食べました。

喉に詰まらせないよう注意しながら、皆さんおいしそうに食べられました。

今年もグループホームでは色々な行事を行っていきます。本年もよろしくお願いします。

グループホーム旭町
漆原

「高次脳機能障害のMさんの介護事例」

平成25年11月、自宅のトイレで倒れ「右側頭葉皮質下出血」で入院されました。倒れる前日まではきちんと家事をこなし、まっすぐで几帳面な性格でした。翌日、開頭血腫除去術を受け、左半側空間無視、認知・注意力の低下、見当識障害等見られましたが、リハビリにて症状が安定され平成26年2月に退院されました。退院直後は特に問題はありませんでしたが、5月を過ぎた辺りから認知機能の低下、意欲低下、病識の欠如など見られ、ご主人ともめる事も多くなり6月よりデイケア利用開始されました。

もともと家から外に出る事が好きではないMさんはデイケアの利用も気が進みませんでした。最初は半日利用から始め、1ヶ月後より1日利用となりましたが、なかなかデイケアに慣れる事が出来ず、トイレに10回～15回位行かれたり、時には食事を摂らなかったり服薬を拒んだり不安行動が見られました。どうしたらMさんが安心して来室することができるのかデイケアで検討をしました。もしかしたらデイサービスの方が合っているのではないかとの事でお試しで数回利用した事もありましたが馴染めず、デイケアを継続して利用する事になりましたが、今度

は来室する事が出来なくなってしまいました。そこでまずは、スタッフと『馴染みの関係』をつくる事にしました。定期的に訪問をしMさんと馴染みつくりをしました。家族の協力と、外に出ることが嫌なMさんに対し、「～に行く」というフレーズを使わずに声かけ誘導すると家からスムーズに出られ、デイケアにも来室する事が出来ました。来室時には、個別で席を用意しMさんの居場所を作りました。すると今までトイレに10回～15回行っていたMさんでしたが、平均3回～5回と減りました。時々、帰宅願望は見られますが、スタッフと昔の話をしたり、眠気が強い時はベッドで休んでいただく事で対応できています。また、表情や雰囲気で調子が良さそうな時は利用者さんのIさんと一緒に過ごして頂く事もあります。Iさんは認知症ですが、日常的な会話にはさほど問題はありません。すぐに忘れてしまいますが、昔の話はよく話して下さいます。Iさんとは生まれた年も同じで、田植えや海苔の仕事をした事があったりとお二人の生活歴には共通点があり似たような世界観を持っている事で、Mさんは「こんなに楽しく話が出来るなんて嬉しいわ。」とIさんの手を握りスタッフが居なくてもトイレに行くこともせずに本当に楽しい時間を過ごす事が出来ています。スタッフが「トイレに行きますか？」と声をかけると、「いや結構です」と言われる事もあります。Mさんに関わり学んだ事は、生活歴や会話、その方の性格などをよく知ることが大切だと思いました。その中にケアの方法のヒントが隠されているのかなと感じました。Mさんの対応はまだ検討が必要な所が多くありますが、実践→分析→評価→反省→実践を繰り返しケアをしていきたいと思います。

柳田デイケア　太田

「職業人として働く人が堅持すべき姿勢、福祉の職場ではどうか」

真面目に誠実にひたむきに、働く。この姿勢をベースにしながら、一つひとつの業務を着実にやり遂げていく。これはすべての職業人に求められる基本姿勢の一つである。では、福祉の世界ではどうだろうか。多くの業界で共通認識となっている「油断大敵」は、共有されているだろうか。“真面目に誠実にひたむきに”が常に維持すべき姿勢であり、それを行動として示す。それが、組織レベルでも、個人レベルでも共有されているだろうか。残念ながら、現実はそうなっているとは言い難い。組織レベルでも、あるいは、個人レベルでも、真面目に誠実にひたむきに業務を行っているとはいえない状況を目の当たりにするケースがある。

もっとも大きな原因の一つは、危機意識の欠如である。福祉以外の業種・業界では、顧客の立場は強い。取引をする立場、商品を買う立場、サービスを買う立場の組織や人は、その内容に納得できない場合、あるいは、不適切だろうと思われるものがあった場合、その場で不満の意を表明しやすい立場にある。納得がいかない対応を受ければ、取引停止が宣言できる。二度とその店に足を踏み入れないとの判断が下せるし、真面目さ・誠実さ・ひたむきに欠けていたとの印象をネット上に書き込み、マイナスイメージが拡散してしまうこともある。こうした状況にあるので、サービス・商品提供にかかわる組織や個人の「油断大敵」という危機意識は、高いレベルに保ちやすい。

福祉の職場の場合は、これとはきわめて対照的だ。利用者の立場は決して強くはない。認知症や知的障害を伴う利用者の場合は、不満や納得できないことがあっても、それを明確な形で表明できない人が多い。サービス提供者側にいる職員が思いを把握しようとの姿勢を積極的に示してくれなければ、不満の意思表示を理解してもらいにくい立場にある。

意思表示能力がある利用者であったとしても、自由に思いが言える立場にあるとは限らない。食事、入浴、排泄、着替え等、基本的な生活の面で介護・支援を受ける立場になると、どうしても「お世話になっている」との意識が脳裏をよぎりやすくなる。支援の方法や内容に不満があったとしても、よほどの事がない限りは声を上げられないという状況にあるケースが少なくない。福祉の職場で働くすべての人は、利用者が置かれた状況を

昔取った杵柄です

正しく理解する必要がある。クレームが寄せられてこないからといって、満足度が高いとは限られない。常に、「今のままの業務レベルでいいか」自問自答する謙虚な姿勢が必要となる。いつ何時も、真面目に誠実にひたむきな姿勢で職務にあたる。そんな決然たる思いをもって働くことが求められるのである。

“真面目に誠実にひたむきに”働くとは何を指すか、その意味を正しく理解する。自分自身がその意味に基づく行動がとれているかチェックする。不十分な部分が確認できた場合は、改善目標を立案したうえで行動を起こす。

こうした取り組みの積み重ねが、“真面目に誠実にひたむきに”業務をやり遂げていく職場作りに繋がっていく。職員個々のレベルでいえば、職業人としてのさらなる飛躍と成長に繋がっていくのである。

（居宅介護支援事業所　飯田）

「記録の充実で介護力の向上を」

私たちはグループホームでもデイサービスでも、全ての部門で介護力の向上をめざしている。その中で特に記録を重視している。それは、見たもの、観察したものを、日本語の活字にかえることです。日本語にまとめて、業務報告書等に記録することです。それをしないと、見たものは、時とともに、頭から消失します。また、ゼロベースにもどります。すなわち、日々の実践がその人の介護力向上に結びつかない。介護職として向上できないことになる。せっかく介護実践をするなかで、感じたこと、学んだことを頭をめぐらし、それを記録作業で整頓し、ノートやパソコンに記録する。そこまですることで実践が生きた経験として成長の糧になります。

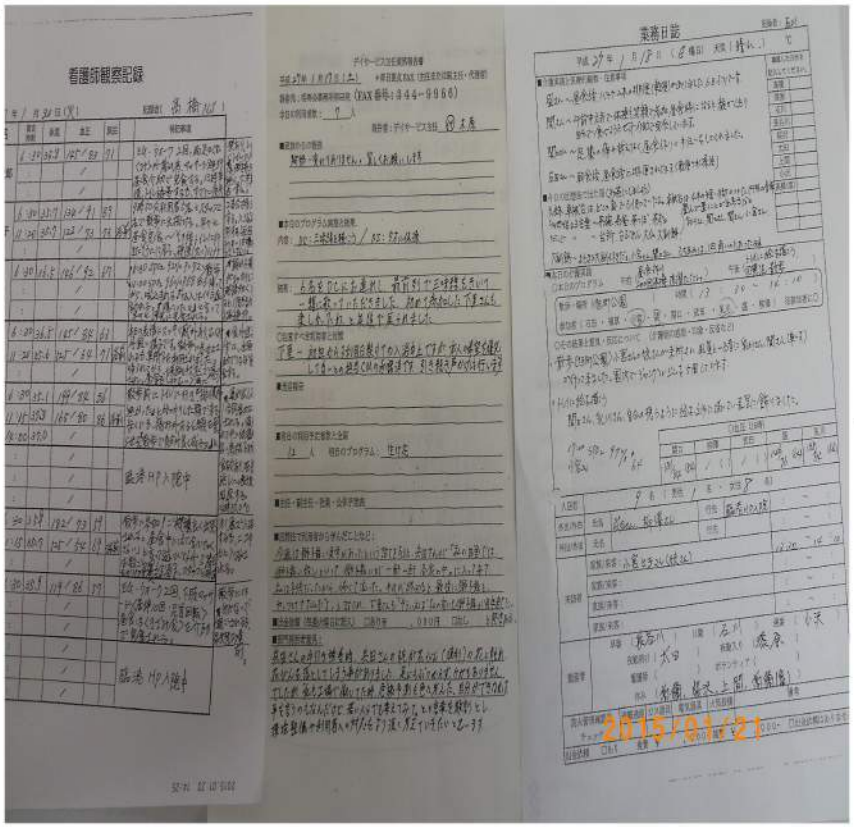
私たちは日々の介護の実践し、利用者さんから色々なことを学びます。学んだことを記録することで見たこと、学んだことを整理し、そのなかの核心的なコツやホネをまとめ活字化、認識化することで目や手や五感からの観察だけでは得られなかった新しい知識や認識を頭に残します。五感からの感覚的レベルの認識が、大脳の前頭葉の高度な認識中枢に高い知識として残される。

いわゆる感覚的な知識や認識を、理論的、理性的な知識に高める作業をする。高齢者がよく私たちにアドバイスするなかに、背骨をつくりなさい、どんな場合でも対応できる人間としての力をつくりなさい、それがこれであり、理性的な知識のことではないかと思います。

この習慣があると、自分が知らないことを発見し、わからない時は次の学習につなげることができます。それを昔から、実践、認識、再実践、再認識といいます。人間はこのプラスの認識運動を繰り返すことで進歩し、発展してきました。さまざまな問題の解決や困難を乗り越えてきた。

向上は時代の要求であり、地域の要求

過去の時代はそれこそ家内労働、家族で高齢者をみる時代でした。今日では国民皆保険、高齢者のお世話は介護保険制度ができました。つまり社会全体が、社会保障として高齢者全体を面倒みるような時代になっています。それは人類としての進歩のあかしです。その分、そこにたずさわる人々には、専門的知識や他人をお世話する介護者としての高い見識が要求されてきます。つまり、時代の進歩に自分をあわせないと生きてゆけない時代が来ていることです。

私たちもこの現実と進歩の歴史を忘れず、時代とともに成長発展していくことです。（柳田）

日々の介護実践の介護記録が成長の糧